

# 博物館だより

No.18

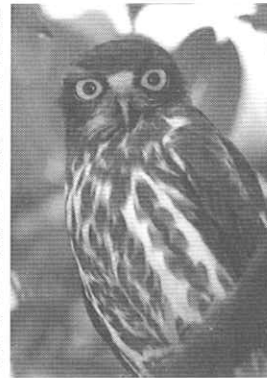
平成 19 年 10 月 1 日  
みやこ町歴史民俗博物館発行  
福岡県京都郡みやこ町豊津 1122-13  
TEL 0930-33-4666  
FAX 0930-33-4667

## 秋の企画展 ① 不動Ⅱ ～向井澄男写真展～

当館では、10月2日から10月28日まで、「不動Ⅱ～向井澄男写真展～」を開催します。

向井澄男さんは、長年にわたり京築地区の祭りや風物を撮り続けた写真家です。平成15年に74歳でお亡くなりになりましたが、昨年、ご遺族より数万点におよぶ遺作が当館に寄贈されました。当館では、ガッシリとした体型だった向井さんのイメージから、「不動」の共通タイトルをつけ、毎年1回、整理の終わった写真を順次展示するミニ企画展を開催すること致しました。

2回目となる今回は、「鳥」をテーマに、向井さんが京築地区をはじめとする近隣各地や、遠く北



アオバズク  
(平成6年/向井澄男撮影)

海道などで撮影した美しい鳥たちの写真を約70点展示します。

ぜひ、ご来館ください。

### ■開催期間

平成19年10月28日(日)まで

### ■開催場所

博物館企画展示室

### ■観覧料

常設展の観覧料のみいただきます。

## 秋の企画展 ② 京築地方の発掘速報展

きたる10月30日(火)から12月24日(月)まで、当館において「京築地方の発掘速報展2007」を開催致します。

この企画展は、平成16年度～18年度に京築地方で実施された発掘

調査の成果を、出土遺物などの展示を通して紹介するものです。

今回初めての試みとして、京築各市町教育委員会と「京築文化財行政連絡協議会」が主催となって開催します。

期間中には「新発見遺跡発掘調査報告会」も開催致します。ぜひご来館ください。

### 【開催期間】

10月30日(火)～12月24日(月)

### 【開催場所】

当館第1展示室

### 【展示品】

京築地区の各市町が平成16年度～18年度に実施した発掘調査の出土遺物約300点。

### 【観覧料】

常設展の観覧料のみいただきます。

### 【新発見遺跡発掘調査報告会】

発掘調査を担当した各市町職員による発掘調査報告会。

### ●日時

平成19年11月17日(土)  
午後1時30分～

### ●場所

当館研修室



蔵持山修験道遺跡発掘調査風景  
(みやこ町犀川上高屋)

## 《古文書解読コーナー》

① 大津

② 皇天

③ 皇天

④ 秋

⑤ 雨

### ◎ 答え

(反対向きに見てください)

- ① 大雨
- ② 天候
- ③ 天候
- ④ 夜
- ⑤ 雨

知ってるつもりヒト・モノ・コトに意外なドラマ…

# みやこの歴史発見伝 ⑦

地名説話とは…

ことば（語り）の文化遺産ともいわれる昔話のなかで、地域でよく知られている土地の呼び名の由来を物語る内容のものを特に「地名説話」と呼んでいます。

古くは「記紀」や「風土記」といった奈良時代に編纂された史書や地理書に多くの地名説話が載せられていることが知られますが、その特徴は各地の主だった地名の由来を、現地に遠征した天皇のエピソードや現地の神々・著名人由来する物語によってユニークかつ地方色豊かに紹介するところにあります。

たとえば九州遠征に出かけた景行天皇が周防灘を進む船から九州の先端を見て「あれが国の先か」と問いかけたことから現在の国東半島（大分県）を「国埼」とよぶようになったとか、同じ景行天皇が遠征の拠点に私たちの町内近辺に行宮を築いたことから一帯を「みやこ」と呼ぶようになったといったものなどがあげられます。ただ、これらの多くは史実としての裏づけに乏しく、歴史資料としての価値を高く求めることは出来ませんが、古人の豊かな創造力

や表現力、またそうしたものを生み出すに至る風土や景観など、地名の舞台となる土地の文化的土壌や背景を理解するには格好の材料といえます。このため説話はそうした視点に立った検証を行う際に文字資料や遺物とはまた違った情報を雄弁に語り出すのです。

## 町内に残る地名説話

そうした視点にたつて、改めて私たちの身近に残る地名説話を見てみるとユニークな内容や背景を持つものがたくさんあることが分ります。中でも注目されるもの一つに犀川帆柱地区に伝わる説話があり、以下にそのあらすじをこ



説話の舞台・帆柱地区。奥が英彦山、右端が焼尾峠

紹介しましょう。

「その昔英彦山には権現様がおられ、山中に繁る楠が白慢だった。これをうらやんだ宇佐の八幡様が英彦山へ出向き一本だけ分けてくれるようお願いしたところ、けんもほろろに断られた。これに腹を立てた八幡様は英彦山の楠全部を根こそぎ引き抜いて持ち帰り始めたところ、これに気付いた権現様は八幡様に火の玉を投げかけた。火の玉は狙いが外れて英彦山の北の尾根全部を焼き払ったために、以後その地を「焼尾」と呼ぶようになった。なお逃げる八幡様に向け権現様は今度は鉾（短めの槍）を投げかけたところこれも外れて築城郡界の山に突き立った。このためそこは「鉾立」と呼ばれるようになり、鉾は後に岩となった。さらに逃げる八幡様が、権現様は今度は弓矢を放ったところこれも外れてわずかに楠一本を打ち落としたが、これが根付いたのが本庄の大楠（築上町）である。結局八幡様は無事宇佐まで帰り着くことが出来、それで降宇佐の八幡様の森は楠が青々と茂るようになり、英彦山には楠が一本もなくなつた。」というなんともスケールの大きなお話ですが、帆柱地区の焼尾峠・鉾立峠という二つの重要な交通拠点（いずれも山道ですが現在も県道として管理されています）の地名由来をユニークに語



鉾が岩になったという「鉾立岩」。傍らをトンネルが貫く

り伝えていきます。ただ面白いのはストーリーだけではなないことで、文化的背景も分析してみると更に奥深いことがわかってきます。説話の背景を分析すると…

まず、その第一はこのお話に「本彦山」と宇佐にそれぞれ「彦山流記」「八幡宇佐宮御託宣集」とよばれる何れも鎌倉時代中期に成立した縁起書（寺社の由来を記すテキスト）があるのですが、その両方にこの物語が載せられているのです。正確には主人公が権現様の替りに法連という彦山中興の祖とされる超人僧になっていることや争奪の対象が楠ではなく「如意宝珠（願い事がかなう魔法の珠）」という違いがあるものの、あとの話の枠組みは一緒なので、この話はかれこれ800年近く語り伝えられ

ていることが考えられるのです。

第二は創話者が英彦山・宇佐八幡両方の植生を熟知しているという事です。高山の英彦山に楠は生えない一方、楠が神木となる里山の宇佐では鬱蒼とした杜が作られるのです。

第三に八幡様の逃げたルートは「宇佐・羅漢寺・英彦山・求菩提山」とよばれる豊前の四大聖地を結ぶ巡礼路であることです。このルートが江戸後期には成立していた御国三十三観音霊場の遍路道の一部であったことも確認でき、この話が札所を巡る巡礼によって帆柱の里人にもたらされた可能性も考えられ、単なる地名説話も様々な文化的・歴史的背景があつて成立することを確認できる顕著な事例として注目されます。



打ち落とされて根ついた大楠。宇佐宮の仙宮でもある

（木村 達美）